

令和5年4月29日

都道府県高等学校野球連盟
審判委員の皆様へ

日本高等学校野球連盟
審判規則委員会 委員長 窪田哲之

「甲子園から全国へ・・・2023年春」

第95回記念選抜高等学校野球大会は、4年ぶりに声援が解禁、またブラスバンドの人数制限も解除され、開会式も出場全36校が揃って行われました。

今大会より10回からタイブレークを開始することになりました。全35試合中3試合がタイブレークとなり、何れの試合もサヨナラゲームでの決着となりました。これも熱気の戻ったアルプススタンドの大声援が選手の後押しとなったのではないかと思います。また、継続試合については今大会もなく、2日の雨天順延を経て4月1日閉幕しました。

今年の「重点指導事項」および「周知徹底事項」を踏まえ、今大会を振り返ります。

1. マナーについて

- ・相手守備のエラーで出塁し、塁上で流行のパフォーマンスをしたので注意をしました。
- ・投手がサインを見て投球動作に入ったときに、1塁ベースコーチがプレイに関わりのない声を出していたので注意をしました。
- ・1塁ベースコーチが打者走者の触塁に合わせて「セーフ」のジェスチャーをしたので指導をしました。
- ・投手がまだ十分に構えきれていない打者に対して投球をしようとしたので、球審が注意をしました。

2. 規則に関わる行為について

- ・捕手がキャッチャースボックスから大きく身体を出して構える行為があり、球審が、常にラインを意識するよう指導しました。

3. スピーディーな試合運行について

- ・バッテリー間のサイン交換が長い。**【5.07 (c) (1) (2) の励行】**
- ・塁に走者が出たとき、投手がボールを長持ちする。
- ・走者1塁のとき、不要なけん制（軸足を外すだけの行為含む）を多投する。
- ・走者2塁のとき、野手と投手のサイン交換が長い。
- ・捕手が投手のもとへ行く回数が非常に多いチームがありました。また、チームによっては、監督が指示して何度も捕手をマウンドへ行かせることもありました。
- ・タイムをかけてから伝令を送るまでに、必要以上に時間が長く掛かり過ぎるチームがありました。

4. 投手の投球動作について

- ・無走者のとき、セットポジションをとった投手が完全静止しない。また、軸足の踵を浮かせて投球する。
- ・無走者での投球時、自由な足を止めることや段階を付けることがある。また、セットポジションの際、身体の前方でボールを保持した両手を下から上に動かす行為があったため、スムーズな動作で投球するよう指導をしました。

5. 規則適用事例について

- ・第2日第2試合、9回表一死走者1・2塁、打者はレフトライン寄りの飛球を打ちました。打球は左翼手が捕球し二死、1塁走者は2塁ベースを回ったところでアウトを確認し、慌てて帰塁しようとする際に、2塁ベースを踏まないで1塁へ戻りました。それを見ていた二塁手と遊撃手が2塁ベースの空過に気づきアピールをしようとしていました。そのタイミングで2塁塁審はタイムをかけ「アウト」を宣告しました。その後4人の審判員が集まり協議し、プレイの裁定としては、審判員は「アウト」を宣告したがアピールを受けていない。また、守備側はアピールしようとしたが、審判員がその前にタイムをかけたためアピールを受け付けられず、そのまま試合終了と思い込み整列しようとした守備側選手を守備位置に戻しました。それから投手がボールを持ってプレーに着き、次打者が打席に入り、球審が「プレイ」を掛けたのちに、守備側が改めて1塁走者に対して2塁ベース空過をアピールしました。審判員がそれを受け1塁走者に「アウト」を宣告しました。その後球審が場内放送で説明をし、両チームが整列して試合終了となりました。このプレイについての反省点は、①2塁塁審以外は1塁走者が2塁走者を追い越したことに気づいていなかったこと、②3人の審判員が2塁塁審に「アウト」の宣告に対しての説明を求めなかったこと、③また2塁塁審が追い越しのあった時点で「アウト」を宣告できず、逆にその後「タイム」を先に掛けてしまったこと、そして④4人で協議した際に追い越しのあった事実を言い出せなかったことの4点です。

皆さんならどうされましたでしょうか。

以上については一部の事例です。また、全国大会だけではなく、各都道府県大会でも散見されている事例です。これらについては、今年改正しました「高校野球審判の手引き」にも記載しております。選手は毎年入れ変わり、新しいチームとなります。私たちは審判委員として根気よく、丁寧に説明をし続けていく必要があります。そのためには何が大切で、どのように対応しなければならないかを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

以上